

2019年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書		提出日 2020年5月10日
氏名： 西垣友恵	実施国：ガボン共和国	調査研究
活動名称	ガボン共和国にみる子どもたちを取り巻く芸術文化について ー子どもたちとアーティストのダンスワークショップの実践からー	
実施期間	2019年9月14日～10月4日までの21日間	
(1) 申請した動機		
<p>協力隊の活動を終えて、「開発」という分野ではない国際協力、もっと対等な立場で何かガボンや日本の子どもたちに還元できることはないかと考えるようになった。その結果、「芸術・アート」という分野でなら“人間”という根本的な立場からフラットにアプローチできるのではないかと思い、大学院に進学しアートプロデュースを専攻した。</p> <p>私は、今回の活動を通して、ガボンの子どものたちを取り巻くアート事情を明らかにしつつ、人脈を広げ、将来的にはライフワークとして、ガボンと日本の子どもたちとのアートを通じた相互交流によって更なる表現の幅を広げ、多様な価値観を受け入れられるようなアートワークショップをガボン人アーティストと共に実施したいと考えている。</p> <p>現在2児の子育てをしながら学業をしていた為、並行して仕事をすることができずアフリカ・ガボンまでの渡航費も高額な為、資金繰りに困っていたところ、貴団体の支援プロジェクトがあると知り、申請した。</p>		
(2) 活動内容概要		
<p>①アーティストへのインタビュー</p> <p>子どもたちと関わっている自ら「アーティスト」と名乗る人々に、普段どんな活動をしているのか、なぜ子どもと関わろうと思ったのか、ガボンの芸術についてどう考えているのか等のインタビューを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各分野のアーティスト＝ダンサー2名、デッサン美術、演劇、音楽、語り部、現代美術）7名 <p>②子どもとアート活動の交わる場所、社会においてアートが行われている場を明らかにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国立美術工芸学校 校内見学、学校長へのインタビューを行った。 ・Institut Francais du Gabon（フランス文化センター） 開催プログラムへの参加、ワークショップ見学2回 ・孤児院（スポーツ・音楽・絵画・演劇等情操系のプログラムを行っている） 滞在期間中ほぼ毎日通い、現地ガボン人ダンサーと子どもたちとのダンスワークショップを開催（1回） ・NGO 社会的な活動をしている現地 NGO「Dimosimori」のディレクターにインタビューを行った。この NGO が2つの孤児院の子どもたちを集めて行っている（チャリティー）ミュージカル公演の稽古を見学（公演日は私の帰国日と重なってしまい、観ることができなかった） ・国立美術・博物館、資料館 開館はしていたが、有力な情報などは得られなかった。 また、公共施設として国立の劇場、音楽ホールは持っていない為、そういったところが主催して行う事業などはない。 ・文化庁 インタビュー調査も行ったが、資料などは入手できなかった。 ・その他各アーティストが行っているワークショップの見学調査。 <p>③学校・教育現場など子どもたちと関わる指導者・教育者へのインタビューを行い、子どもたちにとってのアートの場や情景を明らかにする。</p>		

・ 現地の状況・情報収集

公立の小学校に派遣されている青年海外協力隊員にインタビューを行い、現地の現況を詳細に教えてもらった。(バカンス中の為、実際に小学校訪問はできなかった)

・ 教育省に訪問

初等教育行政官長にインタビューを行い、カリキュラムなどの資料提供をしてもらった。

(3) 活動の成果・苦労した点・反省点等

活動の成果

①修士論文として「ガボン共和国にみる子どもたちを取り巻く芸術文化についてー子どもたちとアーティストのダンスワークショップの実践からー」にまとめた。

②本学では修士論文の成果発表会を一般公開(2020年2月7日~9日)で3日間合計3回行う機会がある。そのうち1回は担当教授が司会進行のもと、論文内容に造詣の深いゲストコメンテーター(美術評論家の福住廉氏)を依頼し、そこでこの論文内容について発表した。

③実際にガボン現地でガボン人アーティストと子どもたちでダンスワークショップを実現した。

インタビューで出会う中ガボン人アーティストと知り合うことができ、また情報系のプログラムを行っている孤児院の子どもたちに依頼してワークショップの場が実現できた。この孤児院には配属1ヶ月程の青年海外協力隊員が活動しており、彼女の伝手と力を借りることができたことは大きかった。アーティストと子どもたちを繋ぐ場を創ることは挑戦であり、また実現できたことは非常に価値があったのではないかと感じている(詳細は本論文3章に記載。)が、その反面課題も残った。

苦労した点

- ・ 渡航前にアポ取りが難しく、また調査期間が21日間しかなかったため、どんなアーティストに出会えるのか未知数であり確実な見通しが持てなかった。
- ・ 「子ども」と「アーティスト」が出会う場や子どもがアートに触れる機会に出会いたかったが、大学院の後期日程との兼ね合いで、渡航時期がガボンの学校関係のバカンス時期と重なってしまったため、なかなかそういった機会がなかったこと。

反省点等

- ・ 基本概念としての「コロニアリズム」や途上国におけるアートの捉え方などの参考文献や先行研究の調査が足りていなかった点があり、そのようなポイントを踏まえながら調査を進めるということに若干の不備があった点を、深く反省している。
- ・ ガボンのアートについて海外で発表された先行研究や参考文献の調査が不十分であった点が否めず、日本のアートの枠組みの文献や調査に焦点が当たってしまった。日本と比較することも意義のあることではあるが、ガボンのアートに踏み込んだ内容にした方が研究の広がりがあり、より意義のある研究になったのではないかと感じている。

(4) 今後のプラン

2020年3月で大学院修士課程を修了し、卒業することができた。

大学院在籍4年間のうち2回出産(2年休学)を経験し、調査渡航時は上の子が2歳半、下の子が9か月であった。その為、当面は子どもたちの育児に専念したいと考えている。また、夫がこの4月から転職し引越しをした為、新しい土地に慣れるのに時間がかかるだろうと考えている。

今回の調査で得たこと(情報や人脈など)や修士論文としてまとめたことは、今後のライフワークとして長期スパンで活かしたいと考えている。具体的な展望として、日本とガボンやアフリカの子どもたちが一緒にアートを通して、何か交流ができないか模索したい。その可能性は今回の調査でも大いに期待が持てることもわかり、どんな分野で、どんなことならガボン現地のモノや人を最大限に活かして、その機会を仕掛けることができそうなのかも、ある程度イメージや見通しも持てた。

また2016年にガボン関係者、仲間とともに立ち上げた「赤道アフリカ友の会」の事務局メンバーでもあるため、今後そういった国内での人脈も活かしながら、アフリカに関わること、何かできることを少しずつでも模索し続け、実行に移していきたいと考えている。

2020年東京五輪でガボンのホストタウンとなっている岩手県二戸市に2020年3月下旬に日本在住ガボン人と一緒に訪問し、今回の調査で私が得た知見、今のガボンのアートや子どもたちの様子を伝えたり、中高生や市民の方とガボン料理を作ったり、ワークショップを行う予定であった。しかし新型コロナウイルスの影響の為延期になってしまったので、開催を楽しみにしながら何かできることを続けていきたいと思っている。